

体験型海外教育実地研究 第4学年 異文化理解

「Names of Traditional Colors ~My color, Our colors」

教育学研究科 学習科学専攻 学習開発基礎専修 酒井麻未

1 はじめに

これまで私は専攻として教育学を学ぶ中で、古来より人間が行ってきた教育の歴史の変遷や、また新たに実践が試みられている教育の可能性など、さまざまな教育の形について触れてきた。そこで漠然と感じていたのは、現在の日本の学校教育制度が「学校教育」の最終的な到達点というわけではなく、あくまで歴史上の一つの通過点であるということであり、また、現在の日本の学校教育の形が「教育」の全てというわけではないということであった。

しかし、実際には日本の学校教育制度の中のみで育ち、また今後もそこを中心に深く関わっていくだろう自分の状況を考えると、俯瞰的な広い視野を持ち批判的思考を行うことの難しさや限界も感じていた。そのような問題意識から、自国の学校教育の枠に留まらない教育の形や、海外の教育現場の空気を、実際に自分の目で見て体感することができる貴重な機会が得られることに魅力を感じ、参加を決めた。

2 実地研究の日程と概要

月日	曜	交通等	訪問地・用務等	宿泊地
4/24	水	渡航までの日程, パスポート, ESTA, 授業研究テーマ事例,		部屋割り
5/15	水	授業研究テーマ案の交流・テーマの設定		
6/6	木	学習指導案の検討		
6/11	火	学習指導案の検討		
6/24	月	学習指導案(英語版)の検討		
7/1	月	学習指導案(英語版)の検討		
7/6	土	第9回学校間交流国際フォーラム		
7/7	日	ワークショップ: 学習指導案および教材・教具の検討		
7/22	月	保険説明(学習指導案の検討, 指導案の提出について)		
7/23	火	保険説明(学習指導案の検討, 指導案の提出について)		
8/26	月	準備状況確認, 報告書・教材集・発表会について, 渡航準備・関係書類提出		
9/9	月	最終事前打ち合わせ(準備状況, 準備物・集合時刻等の確認)		
9/14	土	広島—成田 0755-0935 (NH-3236) 成田—ワシントン ダラス 1105-1040 (NH-2) ワシントン ダラス—ローリー 1220-1329 (UA-4880) 空港 — (ウォーレン先生・ECU バス) →City Hotel & Bistro		アメリカ・ノースカロライナ州 City Hotel & Bistro 203 W. Greenville Blvd, Greenville, NC 27834 TEL(877)2712616 Greenville
9/15	日	(ウォーレン先生・バス)	ミーティング, ホテルにて教材作り 各学校の先生方と事前打ち合わせ レセプションパーティ	Greenville 同上

9/16	月	City Hotel →Elmhurst 小学校へ (ウォーレン先生・バス)	学校訪問 (Elmhurst 小学校) 校内見学, 授業見学, 打ち合わせ 教材・教具専門店訪問 大学訪問 (East Carolina 大学) 図書館, リソースセンター見学	Greenville 同上
9/17	火	City Hotel →Elmhurst 小学校へ (ウォーレン先生・バス)	学校訪問 (Elmhurst 小学校) 授業実践, 授業見学 ECU フットボールスタジアムにて夕食会	Greenville 同上
9/18	水	City Hotel → ECU (ウォーレン先生・ECUバス) ECU → ローリー (ECUバス)	午前 ECU の講義に参加 午後 ローリーへ移動 自然史博物館、ノースカロライナ州議事堂を見学する。	ノースカロライナ州 Clarion Hotel State Capital 320 Hillsborough Street Raleigh, NC 27603 TEL(919)8320501 Raleigh
9/19	木	徒歩で, Exploris M.S.へ	学校訪問(Exploris M.S.) 午後 ローリー市内見学 キッズミュージアム, 歴史文化博物館を見学する。	Raleigh (同上)
9/20	金	ローリー→ワシントン ダラス 1021-1134 (UA-4887) (空港-ホテル間はタクシー)	ワシントンへ移動 アメリカ文化体験	Washington Plaza 10 Thomas Circle, Northwest, Washington,DC 20005-4176 TEL (202)8421300 Washington, DC
9/21	土	徒歩	アメリカ文化体験・Book Fair スミソニアン博物館 (ホロコースト記念博物館, 国立美術館, 宇宙航空博物館), リンカーン記念堂を見学する。	Washington DC(同上)
9/22	日	ワシントンダラス→成田 1220-1525 (NH-1)		
9/23	月	成田→広島 1740-1915 (NH-3237)		

3 実地研究授業

3.1 単元名 第4学年 異文化理解

「Names of Traditional Colors ~My color, Our colors」

3.2 事前準備

① 単元設定の理由

日本には、古来より用いられてきた 465 種類の伝統的な色の名前と、「重ね色目」という二色の伝統色の組み合わせ方の名前が多数存在する。これらは、日本の四季折々の彩りの変化、

自然の草花や木々が見せる美しい色を表現し、その色の調和を楽しむものである。また、アメリカにも 177 色の伝統色が存在している。こちらは四季の自然の微妙な色合いを表現する日本の伝統色とはまた違い、全体的にはっきりとした鮮やかな色味である。色の名前に関しても、アメリカの地名・人名や、アメリカのフロンティア精神を思わせるような独特な表現や特徴を多く見ることが出来る。二国の伝統色を紹介し比較することで、日本とアメリカ両国独自の文化や美意識の特徴を子どもたちが感じ取ることができるようにしたいと考えた。

しかし同時に、時代の流れと共に文化は変容していくものであり、それぞれの国に伝わる伝統色の全てが現代の私たちによって日常的に用いられているわけではない。それでも、日本・アメリカ両国の子どもたちが実際に自分自身で色の名前をつけてみるという活動の中で、現代の私たちまで引き継がれた美意識を感じさせる色名の表現に出会うことや、逆に現在の私たちができない色名の表現をすることもあるだろうと考えた。

以上のように、日本やアメリカに伝わる伝統色に触れること、また自分たちなりに色の名前を表現することを通して、それぞれの国独自の、またその時代独自の美意識や感じ方を味わうことができるのではないかと考え、本単元を設定した。

② 準備したこと

事前に日本の子どもたち（夏休みの長期キャンプに参加した小学4年～中学3年）に、和紙に自分なりの色の名前をつけて記入してもらった。約 40 枚を用意し、アメリカの子どもたちが自分の和紙を貼りつければ重ね色目のポストカード作品として完成するよう下準備を行った。

また、日本の伝統色・アメリカの伝統色の一覧表を、黒板掲示用と児童への配布資料用の二種類用意した。伝統色の例示や重ね色目の例示・説明にも、写真と和紙を使った黒板掲示用の教具を多数準備した。

3.3 学習指導案

Lesson Title : Names of Traditional Colors ～My color, Our colors

Lesson Author : Asami Sakai

Date : September 17th, 2013

Grade Level : 4th grade

Subject : Culture

Description : In this Class, students learn traditional Japanese color names and “KASANE IROME (an overlap with two traditional Japanese colors)” while comparing with traditional U.S. colors. Furthermore, they name colors for themselves. Students will enjoy a sense of beauty and feeling peculiar to each country and each era.

Objectives : As a result of this activity, it will be possible for children to

- 1 . Learn about a sense of beauty and features which appears in each traditional color of Japan and United States.
- 2 .Respect their expressions and sensibilities while naming colors.

Teaching process :

Activity	Teacher' s activity	Materials
1. See the Japanese KIMONO, and think what color it is.	1. Show that the color's name is not mere "Pink".	・ The KIMONO

<p>2. Know about traditional Japanese colors .</p>	<p>2. Show several colors from traditional Japanese color list, and explain them. And show many names originating in natural flowers and trees.</p>	<ul style="list-style-type: none"> • Traditional Japanese color list • Data about several Japanese colors
<p>3. Know about traditional U.S. colors .</p>	<p>3. Show several colors from traditional U.S. color list, and expression characteristic of U.S. color names comparing with Japanese color names.</p>	<ul style="list-style-type: none"> • Traditional U.S. color list • Data about several U.S. colors
<p>4. Give my color name to the colored paper and write it.</p>	<p>4. Distribute colored papers And help them think color names in free way of thinking.</p>	<ul style="list-style-type: none"> • Colored papers • Some markers
<p>5. know about “KASANE IROME (an overlap of two traditional Japanese colors)” .</p>	<p>5. Explain “KASANE IROME” and Japanese culture which enjoy harmony of colors suitable for the four seasons.</p>	<ul style="list-style-type: none"> • The picture of KASANE IROME
<p>6. Paste my colored paper and another colored paper named by a Japanese student on one card, and put it into a T-shirt type frame. Give a name to this KASANE IROME (an overlap of two colors) and write it.</p>	<p>6. Explain how to make and help them think color names in free way of thinking.</p>	<ul style="list-style-type: none"> • Cards • Colored papers named by Japanese students • Some markers
<p>7. Enjoy seeing their work each other.</p>	<p>7. Tell that the opportunity for traditional colors to be used is decreasing now, but unchangeable sensibilities and Expressions peculiar to present-day exist.</p>	

3.4 授業の実際

自己紹介を行った後、アイスブレイクと導入を兼ねて日本の着物について紹介した。実際に持参した浴衣を児童に羽織らせてみた後、その浴衣の色が何色かを問い、展開につなげた。日本の伝統色が 465 種類あることを黒板掲示資料と配布資料を用い紹介し、「桜色」「萌黄色」「曙色」の和紙をそれぞれ桜・若葉・朝焼けの写真と共に例示した。またアメリカの 177 種類の伝統色を黒板掲示資料と配布資料を用いて紹介、「リンカーンレッド」「カリフォルニアセントラルコースト」「ミシシッピキャピタルリバー」を例示した。児童一人一人に和紙とペンを配布し、その和紙に似合う色の名前を自分なりに考えてもらった。指示が難しく、担任の先生の助けもいただいた。なかなか考えつかない子もいたため、机間指導を行いながら皆が揃うまで待った。

次に重ね色目について黒板掲示資料を用いて紹介した。

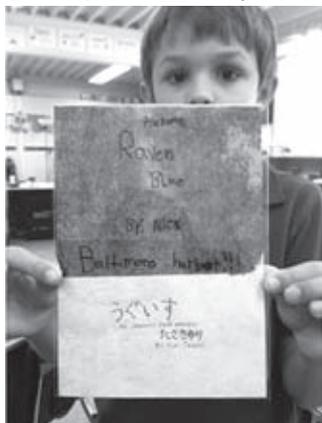
和紙と写真を使った重ね色目を例示するたび、児童全体から“Beautiful.”という小さな歓声を聞くことが出来た。日本の子どもが名前をつけたカードを全員に配布し、先ほど児童が名前をつけた和紙を貼りつけたのち、カードの重ね色目の名前を考えてもらった。指示が難しく、机間指導で身振りを交えながら補足した。完成したカードを鑑賞し合う時間をとった後、色の名前からそれぞれの国や時代に生きる自分たちのことを考えることができるということをもとめとして伝えたが、私の英語が拙く、児童らはどこに授業の結びが終着したのか理解できていないようであった。



3.5 考察

本授業での大きな反省点は、細案に頼ろうとしすぎたこと、そしてその細案の完成度の低さの二つである。本番の授業は細案を片手に進めていたのだが、配布物・掲示物に手間取ったこともあり、次に全体に向けてどの指示をすればよいのか混乱し展開を止めてしまう場面が幾度もあった。また、その細案自体も、自分がどのようなことばを使えば一番児童にうまく伝えることができるのか、ことばの精選ができていなかった。特に児童主体となる活動を指示する場面と、最後のまとめの場面では、ことばに対する自分の準備不足を痛感させられた。

一方、ことば以外の情報で伝えるということに対しては、本題材が色という非常に視覚的な題材であることから、視覚情報によって児童の興味や感動を引き起こす必要性を事前から強く意識していた。そのため準備の段階から教材・教具の数が非常に多くなり、本番の授業で混乱してしまうことも予想されたが、一つ一つの視覚情報を黒板上に積み重ねて残し、全体的な色どりや和紙の重ねの美しさをより感じる事ができる、アナログの教具で挑戦することを選



択した。予想通り、配布物・掲示物にかかる時間や混乱は大きかったが、重ね色目の例示をする際に児童たちから漏れた歓声に、国籍を越えて「美しい」と思う気持ちは共有できるのだということを実感でき、深く感動した。

出来上がった重ね色目の作品を見てみると、それぞれに児童オリジナルの名前をつけることが出来ていた。その中にはアメリカの子にしかできない、日本の子にしかできないだろう表現もあり、同時にどちらの子どもにも共通するような表現もあった。しかし、それらを児童たち自身に気付かせるところには至らなかった。

4 体験型教育実地研究における自己変容

4.1 教育観の変容

授業を見学させてもらい、特に感動した場面が、IT 機器によって音楽や映像が教科を問わず頻繁に学習に取り込まれているところや、子どもたちが私でも知らないようなソフトを使いこなしながらそれぞれの個人学習を意欲的に進めている場面だった。IT 機器の活用、子どもの自主性など、言葉だけならよく使うけれども、それが実際の学校教育の中でどう具現化し、どう根付いていくのかという一つの形を確認出来たように思う。

教育機器や学校設備、または教員数など、アメリカの学校が持っている教育資源の豊富さに、全くうらやましさを感ぜなかったかという嘘になる。しかし、広い世界を見て初めて、自国にないものとあるものが客観的に分かる。そしてないものに気づけたからこそ、あるものをいかに有効的に使っていか・どう生かしていくか考えられるし、ないものを取り入れていくための前向きなアクションが起こせるのだと感じた。

4.2 自分自身についての変容

子どもたちを前に授業をさせて頂けること自体、自分にとって久しぶりで、教育という分野に対してわくわくする自分を再認識することが出来た。最近では将来への不安や無力感ばかりで、その気持ちを見失っていた部分があったのだが、日本の学校教育の枠組みに入ってみると、そこで自分が出来ることについて少し前向きになれたように思う。

また授業づくりや学校見学の中で、「ことばを越えた感覚で伝えること」という自分の問題意識が自然と色濃く出て、自分が「アート教育」という研究テーマの中で何がしたいのかということを確認できた。同時に、ことばで伝えることを選ぶなら、そのことばを大切に扱っていかなければならないことを強く感じた。

4.3 グローバルマインドに関する変容

これまで英語に対する苦手意識が強くあったが、うまく英語が話せなくても気持ちの持ちようでもコミュニケーションできた体験を積み重ね、また自分の授業中に「美しい」という感情の共有ができたことから、ことばを越えた意思の通じ合わせ方もやはりあるのだと感じた。同時にそれを乗り越えて「やっぱり英語でもっと話してみたい！」という気持ちも持った。

今回アメリカの教育現場を体感することができ、他者の存在によってようやく自分自身の存在が規定されるように、世界を知るからこそ自分の国を知ることができるのだと感じた。また日本だけでなく、どこの国も「子どもを伸ばしたい」という願いは同じで、実際は国によってそのやり方に差があるけれども、本当は国に関係なく、世界中の子どもを世界中みんなでもより良い方向へ押し上げていこうとしているのだというイメージもできた。

5 おわりに

本当にとっても充実した日々だった。小原先生・松浦先生をはじめ GPSC の先生方には本当にご負担やご心労ばかりおかけしたし、また、よい刺激をくれた仲間たち、現地でお世話になった先生方、子どもたち、そして温かな笑顔のウォーレン先生、感謝すべき人びとの顔が次々に思い浮かぶ。きっとこの日々はこれからの自分の大きな支えとなり、軸の一部となると思う。皆さまに心からの感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。